

6

Rd.

SEP 2011

平成23年10月15日発行
第2巻27号

RACING PRESS

apan

2011 AUTOBACS SUPER GT
ROUND6 FUJI GT250Km RACE



2011 SUPER GT



Round 6
FUJI
9/10-11

Editor
吉川絹恵

Photo
鉄谷康博
加藤智充
中村佳史
小澤克仁
近江 勤

終盤を占う正念場決戦!



スーパーGT第6戦は9月11日静岡県の富士スピードウェイで開催された。このシリーズは全8戦で争われ今回は終盤戦とも言える第6戦、今回のポイントがシリーズのランキングに大きな影響を与えるといっても過言でない正念場決戦でもある。すでにGT-Rが3勝、HS-010が2勝と分け合っているが、まだ優勝がないレクサス勢がどんな戦いを見せるか見所のひとつでもある。激しくなってきたポイント争いだけのどのチームにもチャンスがあり目が離せない。一方GT300は着実にポイント挙げたジムゲイナーフェラーリに激しく迫る初音ミクBMWとハンコックボルシェが快進撃で迫っている。欧州車有利の富士スピードウェイで白熱した戦いが繰り広げられるは間違いのない。



WINNER

GT500



GT300

ホーム/レクサスが復活の今季初優勝!

今季初勝利でのぞんだレクサス勢は予選からアグレシブに攻めで上位5位までを独占、6番手8号車のHSV、7番手に46号車のGT-Rが並んだ。今季ここまで勝ち星のないレクサス勢の逆襲がいよいよ見えてきた。決勝はレクサス勢の好スタートで始まり、混乱なくオープニングラップを制したのは石浦宏明のドライブする39号車。序盤からぴったりと追いかけるのは38号車の平手、3案番手に6号車エネオス大嶋、4番手に35号車アンドレ・クートのレクサス勢が続き序盤をリードの展開。中盤に入りピット作業が終了し、39号車井口と38号車立川の2台に絞られバトルが続く。53周目38号車立川がついにコココーラでアウトから井口を捕らへ、ついにトップが入れ替わり逆転劇でホーム富士でレクサスが初優勝を奪い取った。

[GT500 決勝結果]

優勝	38	ZENT CERUMO	SC430	立川祐路	平手晃平	55周
2位	12	カルソニックIMPUL	GT-R	松田次生	JP・デ・オリベイラ	55周
3位	17	KEIHIN	HSV-010	金石年弘	塚越広大	55周
4位	1	ウィダー	HSV-010	小暮卓史	ロイック・デュバル	55周
5位	100	RAYBRIG	HSV-010	伊沢拓也	山本尚貴	55周
6位	23	MOTUL AUTECH	GT-R	本山 哲	ブンワ・トレルイエ	55周



GT500

2nd



3rd



周回遅れに詰まった39号車にアクシデント

初音ミクBMW2勝目でランキングトップに!



GT300

大きなウェイトハンディを背負いながらポールポジションを獲得したのは4号車初音ミク・グッドスマイルBMW。スタートドライバーの谷口信輝がステアリングを握り、スタートダッシュを見せトップをキープしたまま2番手ドライバーの番場琢に託した。番場もこのマージンを削ることなく安定な走行を見せ、2位の14号車レクサスIS350に大きな差をつけたまま、見事に今季2勝目を完勝で飾った。ドライバーランキングトップのジムゲイナーはラスト10周で接触したタイヤがバーストで手痛いノーポイント、優勝した4号車がランキングトップに踊り出た。

[GT300 決勝結果]

優勝	4	初音ミク・グッドスマイル BMW	谷口信輝	番場 琢	51周
2位	14	SG CHANGI IS350	折目 遼	A・インベラトーリ	51周
3位	2	エヴァンゲリオンRT初号機アップル紫電	高橋一穂	加藤寛規	51周
4位	88	JLOCランボルギーニ RG-3	井入宏之	関口雄飛	51周
5位	25	ZENT Porsche RSR	都築晶裕	土屋武士	51周
6位	62	R&D SPORT LEGACY B4	山野哲也	佐々木孝太	51周

THE FACE CLOSE-UP

Naoki
YAMAMOTO
山本尚貴

Text by M. Shimamura

Photo: Tomomitsu Kato



爽やかな笑顔で人気急上昇! 強い信念のもと、真摯に勝利を目指す!

山本尚貴、23歳。昨年SUPER GTへデビュー、ホンダ期待のルーキーとして、いきなりGT500への参戦を果たした。チームは往年のドライバーとして知られる国さんこと高橋国光監督率いるチーム国光。山本にとっては雲の上のような存在だったが、思い起こせば、遠い記憶の中に“国さん”との接点があった。

山本が初めてGTレースをライブで見て、心を奪われたのは、“チー国”のRAYBIRDカラーがまばゆいNSX。「カッコいいなあ、いつかあのクルマに乗ってレースがしたいなあ」と夢のような憧れを胸にし、ミニカーを購入したという山本少年は、今、クルマこそHSV-010へと変わったものの、まさにその夢を実現させたのである。

レーシングカートを経て、鈴鹿SRS-Fのスクール生となった山本は、その後スカラシップを受けて全日本F3選手権への参戦チャンスをつかむ。屈託のない笑顔で多くの人と接し、低姿勢での対応が、周りの関係者に爽やかな好印象を与え、いつしか「部長」と呼ばれるようになった。だが、その一方で、レースへの情熱をふつつつと燃やし、不本意な戦いをした際には、人目をはばかることなく涙する。当然のことながら、気持ちが形となって表れる彼のパフォーマンスに魅せられるファンも増え、最近ではサーキットでのピットウォークでは、老若男女問わず、彼の前には長い行列が見られるようになった。

SUPER GTそして全日本選手権フォーミュラ・ニッポンでのダブルデビューを果たしてから2年目のシーズンを迎える今年、Fニッポンでは開幕戦の鈴鹿でポールポジションを獲得し、ライバルたちに鮮烈なインパクトを与えたものの、決勝ではスタートで自滅。またSUPER GTでは時折速さを見せるが、表彰台の真ん中まではまだあと一歩及んでいない。

自分に足りないものはなにか。彼はつねに自問し、その課題に真摯に取り組む日々を過ごす中で、ドライバーとしての強さを積み重ねている。「今日はブノワ(・トレルイエ)さんに背中を見せつけられたが、次のバトルでは、絶対に背中を見せつけてやります!」—GTの激しいバトルに破れ、言い放った言葉。その実現を誰もが待ちわびている。

【ドライバープロフィール】

1988年7月11日、栃木生まれ。カートを6歳で始める。各選手権で好成績を残し、2004年から06年にはイタリアのシリーズ戦にも出向き武者修行をした。18歳で鈴鹿レーシングスクール・フォーミュラ(SRS-F)に入校。レースのノウハウを学び、以来、FCJ、全日本F3選手権へとステップアップ。09年にはF3-Nクラスのシリーズタイトルを獲得。今季はフォーミュラ・ニッポンとSUPER GTに参戦中。

